

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 114 号

平成23年10月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

<http://encounter.agape.gr.jp/>

「ミス・ローラ・J・モーク その信仰と生涯」より（5）

七灯塾とモーク先生

小沢辰男

第2次大戦は、多くのいたましい傷あとをわたくしたち日本人にのこしましたが、敗戦によって、一人一人の生き方を反省させてくれた点では、大きな天の恵みであったと思います。私もその一人でありました。そして、わたくしに関して言えば、戦争中と戦後の精神の成長、神との出会いは、大きな流れの中でいうと、モーク先生につながり、モーク先生とモーク先生の清いそしてきわめて澄みきった信仰に生かされ、その信仰に包まれていたのではないかということでもあります。

戦後の4年間ほどのバイブル・クラスを通じて、...英語もよくわからないので、たいへん困りましたが、非常に簡潔で、ことばの生命そのものに食いついた表現をされることにおどろいたものです。よくわかるようになると、単純で明快で明晰になるのだなと教えられました。達すれば、おそらく地味でそばくで単純で明快になり、子供のように清くなるのだということでした。...モーク先生の信仰は、白山教会にそして先生の教えを受けたわたしたち日本人に、ながく生き続け、やがては、知らぬまにそして神のはたらきにより、大きな実を結ぶことになるのだと思います。（武蔵大学教授）

モーク先生

岡田五作

ミス・モークから、1961年9月9日付でいただいたお手紙の最後の部分には次のように記されていました。

“My prayers are with all my friends in Japan daily! My heart is there too!” (私の祈りは、毎日日本の友達と共にあります。私の心もそこにあります。)

そして、なおP・S(追伸)として、

“I feel we may meet above sooner than we think!” (私は、私たちが思っているのより早く天においてお会いできるように思います。)

とあります。...

ミス・モークとわたしとの関係は、主として、東京聖經女学院ならびに日本聖書神学校の教師としてでありました。前後を通じてのお交わりは30年にも及びます。ミス・モークには、一般のアメリカ人には多く見出せない、何か東洋的な、日本的なものがあつたように感ぜられます。そして、よき教師に不可欠のいわゆる人格的魅力というべきものが豊かに備わっていました。優秀な青年を数多く引きつけられた理由もそこにあるのではないかと思います。たしかに、彼女は、日本宣教百年の歴史の中で、婦人の宣教師としては、その首位に位置せらるる人であり、その残された感化力においては、比類稀な主の仕え人であつたと信じます。彼女を天に送って、感謝の思いはひとしお深まりゆくを覚えます。彼女にとっては、地も天も、主の現臨において一つであつたでありましょう。今や、主の前における、われらのためのいのりは、かつての日にもまして切なるもののあることを感じます。おそらく、われらもまた、彼女の言葉にあつたように、われらの考えているよりも早く上なる世界で相会することでありましょう。彼女の足跡に従うことのできる主のしもべとならせていただきたく切に祈る者です。

(日本聖書神学校校長)

モーク先生を憶う

勝田義郎

エピソードのないのがエピソードであると、小西先生が言われたのは至言であろう、モーク先生はことさらに力まずてらわず、ひたすらに神の道を実行された方である。自分を偉く見せようとか、人のおもわくを気にするとかいうことはおよそ先生とは縁遠いことであつた。つまり平凡に見えた。しかし、それはまさに偉大なる平凡であつた。その平凡らしく見える、身についた信仰に人々はひきつけられたのであつた。...

モーク先生から受ける印象は、先生が徹頭徹尾神のご命令のままに一日一日生きておられるということであつた。先生がひたすらに求めて祈り、神のみ声を聞き、それを実行しておられることがいつもはっきりとうかがわれた。先生においては信仰はすなわち生活であつた。先生の信仰、神への絶対的誠忠が毎日の生活に大きく身を結んでいたのである。信仰をもつ人の生活とはまさにこのようなものであるが、モーク先生に接した人たちは深い感銘を受けた。そしてそれは無言の伝道となり、人々の心の奥深く浸透して行った。それは神ともいにましてモーク先生を励まし力づけ、先生を用い働かせ給うたからである。...

モーク先生をおもう時、頭に浮かぶことはまた Eschatological Faith in God ということである。エスカトロジカル。これはまた難しい単語である。...しかしこれは大切な言葉であつた。終末的信仰、つまりいつこの世の終りが来て主イエスが再びお出でになろうとも、それに応じ得る準備態勢を整え、あとでなげきはがみすることのないように、一日一日それに即した信仰生活を送ることである。モーク先生は映画を見に行かれなかつた。映画を観ている最中にもし主イエスがいらっしゃったらどうであろう。映画館などで主イエスにお目にかかりたくない、というのが先生のお考えであつた。

次にモーク先生がいつも主ご自身を説かれたことを私はあげなければならぬ。...

(東京都立白鷗高等学校教諭)

モーク先生を偲ぶ

金子益雄

私にとって忘れがたい尊敬する人物の一人は、モーク先生である。私が初めてお目にかかったのは昭和 22 年の初夏、日本聖書神学校に入学した時であった。岡田五作先生より「キリストの香りをもつ宣教師だ」と紹介され英語聖書を教えていただいた。ある日神学校の礼拝の時にマタイによる福音書第 16 章 13 節以下のピリポ・カイザリヤ途上の記事を読まれて、「皆さんはイエスをいかに思われますか、預言者か、最大の教師、愛の人、または宗教的天才でしょうか。しかし、皆さんはもっと別の答えをしていただきたい」と迫り、しばらくしてから「あなたこそ、生ける神の子キリストですと告白するものが、真のキリスト者である」と、信仰の核心を明らかにとかれた。その時のモーク先生の権威ある態度は、その美しい朝の自然や学友の思い出と共に、18 年後の今でも鮮やかによみがえってくる。

...私は神学校で直接教えて頂いたのは、わずか 1 力年に過ぎなかったが、...いま、先生の印象を要約すれば次の通りであった。

(1) み言葉の役者

モーク先生は実によく聖書を読まれて、その真髄を把握して、深い意味をくみ出し、平易に、単純に、しかも割り引きなしに教えてくださった。聖書の真理を、このように単純に語った宣教師は、他に例が少ないであろう。...ある時 K 兄が「先生はなぜそんなによく聖書をごぞんじですか」と質問したら、「毎朝 5 時に起きて聖書を学ぶのです」と答えられた。たゆまない研究と深い信仰からわき出る聖書の講義はまったくすばらしく、人々をキリストに直面させた。先生は文字通り聖書一巻に徹した偉大な御言の役者であった。

(2) 愛の使徒 モーク先生はみ言葉を説くことにおいてすぐれておられただけでなく、キリストの愛を身をもって実践された。...

(3) 祈りの人 モーク先生は実によく祈られた。...あの講義も、あの愛の業も、キリストの香りを想わせるご品性も、深い祈りから出たものであろう。...

(香川県直島伝道所牧師)

神のことばとしての聖書を

菊地 裕

モーク先生をとおして教えられたことで、一番強く私の心に残っているのは、なんといっても聖書の読みかたである。聖書は神のことばだとはよくいわれるが、これを百パーセント信じて行動した人はきわめてまれで、モーク先生はそのまれなケースの一つだったと思う。たとえば先生は、「聖書の中には神のことばがある」といういい方には不満であった。そうだと、聖書のある部分は神の言葉で、他の部分はそうでないということに、なりかねないというのである。やはり、The Bible is the Word of God. 「聖書は神のことばである」といわなければだめだというのであった。...

モーク先生のこの徹底した態度は、聖書の一つ一つの個所の解釈に、当然はつきり表れていた。たとえば奇跡について、これを「象徴」と見ることは厳に戒めておられた。...それゆえモーク先生にとって、特に象徴であると聖書自身がことわっていない限り、その中に記してあるいっさいの事件は、すなおにそのまま受けとるべきものであった。カナの婚礼でイエスが水をぶどう酒に変えた話、ただ一言でガリラヤのあらしが静まった話、わずかのパンと魚で数千人の飢えをいやした話などについて、ずいぶんさまざまな説明 ときにはかなり「苦しい」と思われる説明 をきくことがあるが、モーク先生にとって、そのような解釈上の操作は、およそ必要のないことであった。いわんや主イエスの復活や再臨を、いわゆる「精神的に」だけ解釈するやり方は、モーク先生にしてみれば、とんでもないということであったろう。...

結局ぼくにとっては、聖書をあれこれといじりまわすことは、ほとんど必要なくなった。シンプルといわれてもよい 体裁のために信じているのではないから 聖書にあることは、すなおに信じてゆきたい。モーク先生が簡潔に「私は死人のよみがえりを信ずる」といわれた。あのよう、この地上に残された旅人の歩みをたどってゆきたいと考えるわけである。（青山学院女子短期大学教授）

モーク先生

喜多川篤典

私が初めてモーク先生を知ったのは今から約 27,8 年前私が一高 2 年生の時であった。そのきっかけは今ではもう故人になられた英語の片山毅先生がクラス担任であったので自分は将来外交官になりたいから英語の会話を勉強したいと思うと相談したところ、それならミッショナリーの方のバイブル・クラスがよいだらうということであった。(そして白山教会のバイブル・クラスの立看板を見て、集まりに参加した。)

...

モーク先生の人格と温情には強く打たれていたが、当時はまだ信仰のことはよくわかっていなかった。しかしわたしは何か感ずるところがあり、まもなく洗礼を受けた。その後...バイブル・クラスにも日曜礼拝にも出なくなった。...

しかし、この間たえず私をキリスト教につなぎとめてくださったのは小西芳之助氏である。私が郷里が神戸であり小西兄は当時安田信託会社社員として西宮に住んでいたため私が夏休みの帰省にあたりモーク先生が一高の後輩として私を紹介されたのである。私と小西兄との交友が今日まで続いてきたのもモーク先生によるものである。そして一高卒業の前後から故三谷隆正先生などをおして再び信仰の方へもどっていった。以後、...結局は無教会の矢内原先生の集会におちつき今日に至った。この経歴が示すように私の過去はまことに木の葉のごとくゆられてきた。恥ずかしい告白である。

私はここで教会だ無教会だといったことを言うつもりはない。要するに一個の魂のさすらいであった。私がモーク先生のバイブル・クラスで、また白山教会で、単純率直なそして永遠に変わることなき信仰を、そして洗礼を受けたのであることを 20 数年前のそのときわかっていたら、そのままモーク先生のところに、白山教会にいたであろう。しかし、そのことを知り得た今、私はこのままで今の自分に居る。ちとせにかわるることなきキリストの十字架に。

(東京都立大学教授)

感謝の思い出をもって

ゲルトルド・エ・キュックリヒ

41年前モーク先生を初めて知りましたとき、先生は、聖書を教えて、忙しくしておられました。先生は全精魂を打ち込んで、神の言葉を伝えるという召命に従っておられました。

以下私が深い感銘を与えられ、かつ同じ宣教師であった先生に対して深甚なる讃美をささげるもととなった1,2の事実について申し上げます。

第1。先生はご自分の都合や社交上のことで、月曜午後のバイブル・クラスの人々との会合を、決しておやめになったことはありませんでした。先生のこのキリストに対する真実、また神を求める人々に対するこの真実こそは先生の聖書講義が大いなる成功をもって祝福された秘訣でありました。

第2。夏中も、一回の聖日、バイブル・クラスを休んで、他で過ごすということはお考えになりませんでした。毎月曜日の朝早く、お疲れであったが輝いた顔つきで、私たちの夏の山に家であるバーンファインド先生宅に帰って来られるのを見ることは、若い宣教師たちにとって、大いなる励ましでありました。...

しかし、先生と私との長い美しい友情の冠となる経験は、昭和20年初秋、不幸かつ悪しき別離の時も過ぎて、先生を訪問すべく高円寺における石館博士邸をおとずれることができたその日のことでありました。お互いの経験を語りあったその時よ、ともに礼拝しかつ祈りしときのその瞬間よ。

誠に私は先生を同労者として、持ったことを大いなる特権と存じます。お互いの現実の仕事は、場所においても専門においても遠くはなれておりましたが、お互いの関係は、常に美しく、香り高きものでありました。昭和20年3月7日広野牧師と語りあった時も、お互いの友人であるモーク先生のことを語りあって神に感謝いたしました。私は信じて疑いません。先生の神とキリスト者に対する曇りなき誠実は、よき実を結びつつあることを。 (宣教師)

モーク先生の信仰について

小西芳之助

先生の信仰は、一言で言いあらわせば天国の信仰でありました。先生の生涯は天国への旅でありました。先生はこの望みを、お母上よりお学びになりしことと私は推察いたします。先生の40年間の日本でのご生活は平凡でありました。伝道女学校（のちに聖經女学院および日本聖書神学校）の教師と数個のバイブル・クラスをお教えになったのみでありました。しかし天国への旅路を人に示すには、その平凡なご生活がすこぶる有力でありました。私は確信します。人に永遠の生命を示しそれをうる道を示すことが伝道であると。この観点からすると、先生は偉大なる伝道者でありました。イエスの弟子たちが、伝道の大いなる成果をあげて、イエスに報告したとき、イエスは「伝道の成果の上がったことを喜ぶな、汝等の名の天に記されたることを喜べ」といった。

先生の愛の人であられたこと、したがってすべて彼女に接する人とは先生をしたった。また先生は謙遜であられた。ご自分の名の出るのを極度にきらわれた。また先生は自身の仕事には忠実であられた。私は昭和22年秋から1年間、本所緑星教会の牧師をしたが、毎日曜午後、小石川より電車でいらして、牧師館にて横になってお休みになっておられたことを、目に見るように思い出すが、自分のお仕事には誠実をつくされた。これらの愛といい、謙遜といい、職務に忠実なことなどすべては、先生の天国の信仰から流れ出たものであると思う。

この天国の信仰の先生が、太平洋戦争の終戦前に、外人抑留所の全部が明日銃殺されるとの風説が広がったとき、この抑留所にありし先生は、「不安と恐怖とにたえかね、身の置きどころもなかりし程なりしとき、復活のイエスを仰ぎみて、はじめて平安がみなぎった」と、ご帰米後、婦人大会においてお述べになったと藤田昌直牧師より聞いたが、先生の長い間の信仰をもってしても、肉体にある間の人間の心の動揺を知るとともに、先生の平安獲得の道なりし、復活

の主イエスを仰ぎみるの信仰の秘義を学びたきものなり。そしてこれはモーク先生の日常の小さい悲しみ、苦しみのときにもいつも主イエスを仰ぎみておられたことと確信する。われらもまた日常の小さい、悲しみ苦しみのとき、悲しみ苦しみのなき平凡のとき、またうれしいときにも、主を仰ぎみて、天国の旅路を、毎日歩みたい。そして天国において先生とお会いしたい。

(日本基督教団高円寺東教会牧師)

モーク先生の思い出

小牧誠夫

モーク先生を思うとき月曜会のことを忘れる事は出来ない。毎日曜日のバイブル・クラスで教えられた聖書の教え これも、きれいな英文で準備されプリントされたもので行われ貴重なものであったが もさることながら、毎週月曜の午後、先生のお宅で先生がサービスして下さる紅茶とケーキをいただきながら、讚美歌のレコードをきき、お互い同士で信仰の問題その他のことを話したり、先生と一対一で話し合ったりしながら、お互いの温かい心の交わりを覚え、信仰を進められ、必ずその後で祈祷会を開き、祈ることを教えられ、またそれによって力を与えられ、信仰を進められたことである。そこには確かにミス・モークがあった。ミス・モークの信仰と主の御守りがこれを作り上げていた。...

第2次大戦が迫っていた昭和14, 5年頃にはこの私たちの語り合いの中にも日常の問題を通して政治、社会に関係のあるいろいろなことも出てきたが、モーク先生は常に、より根本的なすべての基盤となる私たちの心を信仰により強くされた。教えられる言葉は聖書から出て、表面的、現象的なものについてはあえてふれられなかった。ときとしてこのような先生の態度に性急な私は不満を感じることはあったが、疲れた気持ちはここで慰められ元気を与えられた。この月曜会のお茶とプレーヤーミーティングは、多くの兄弟が忘れられないものであると思う。そしてそれはミス・モークなくしてはありえなかったことと思う。そして小学校のころから日曜学校に行きながらもたもたしていた私が受洗にまで導かれたのもこの月曜会に負うところが大きかったと思う。

(バッジには) 聖書と燈火が図案化され、モーク先生の選ばれた聖書の言葉、テモテ後書2章15節「なんぢ真理の言葉を正しく教へ恥づるところなき労働人となりて、神の前に練達せるものとなら

んことを励め」がしるされている。私が戦争中東京を離れ、名古屋にいる間、常に私を励ましてくれた言葉である。

またモーク先生から教えられたのは同じくテモテ後書3章14～15節「されど汝は学びて確信したるところに常に居れ。なんぢ誰より之を学びしかを知り、また幼き時より聖なる書を識りし事を知ればなり。この書はキリスト・イエスを信ずる信仰によりて救に至らしむる智恵を汝に与へ得るなり」である。モーク先生から教えられたものは非常に多く特にどれがどれと言えないが、あの戦争の間に印象深く私を守ってくれたのはこれであった。...

モーク先生は信仰の人であったといわれる。確かにそうだと思う。単に口で聖書を説くだけでなく、実生活の上で実践をされたと思う。

戦争になって困難が増した時に、モーク先生の子供のころの話をきいた。夕方日が暮れてあたりが次第に暗くなるにつれて近所の家々の窓からのあかりがだんだん明るく輝いてくるのをふしぎに思ってお母さんにたずねたところ、暗さが増せば増すほど光は明るさを増すものである、信仰も同じであると教えられた。またルカ伝12章35～40節の忠実なる僕の話がされた。...

(沢藤電機総務部長)

荒野に水がわきて

酒枝義旗

「荒野に水がわきいで 砂漠に川が流れる 焼けたる砂は池となり 乾いた地は水の源となり 山犬の伏したるすみかは 芦よしの茂り合う所となる」

聖書の中に空の星のように輝いている数々のみことばの中でもとくに慰めふかいものの一つは、このイザヤ書 35 章の中の聖句であります。文明が日々に発達し、人間の社会生活はますます進歩してゆくといわれますが、人の心の中の世界を見れば、昔のままに乾いた荒野そのままの姿ではないでしょうか。しかし神様は、この荒野を旅する私たちのために、ところどころに清らかな水をわき出させてくださるのであります。私もありがたいことに、そうした清水のわき出る泉のいくつかに出会うことを許されました。あまりにも乾き切って荒涼としているこの世の歩みにともすれば疲れはてようとする魂が、そうした清水によって、どんなに生き生きと力づけられたかわかりません。モーク先生は、私に、そうした清水の一つを教えてくださいました。

それは終戦後間もないころ、小西先生のお宅でモーク先生を囲むスキ焼の会が持たれたとき、承ったお話しによってであります。すぐる太平洋戦争中、モーク先生は他の宣教師のかたがたとともに、監禁生活を送られました。その収容所にはモーク先生たちの日常を監視し監督するための数人の看守がいて、散歩を許される時でも、必ずいっしょについて行くのでした。

(散歩の時、多摩川べりの道にはえていた雑草を食用にしようと採取したら、看守に取り上げられた。その夜今朝の看守が来て次のように言った。)

「今朝はあなたがたに対してずいぶんひどい態度をとった、どうぞ許して下さい。あの時は、ああするほかなかったのです。ちょうどあの時、私たちの方を見ている人がいたのです。あなたがたが、あの草をとったのをそのまま見のがしたら、もしかすると、そのこと

が収容所の方に通報されるかも知れない。そうなれば、あなたがたは、今後、あの草をとることはできなくなります。そこで気の毒だったけれど、あんな仕打ちをしたのです。その代り、あの草の生えている間は、これから私は毎日 1 時間だけ早く家を出て、出勤前にあの辺に行き、草をとってきて上げるつもりだから、どうぞ安心してください」と静かに言って、すぐ出て行かれました。それから毎朝、ほかの職員がまだ出勤しない前に、この看守の人は早く行って例の草を採集し、モーク先生たちにそっと渡しました。モーク先生たちは、それによって野菜の欠乏を補うことが出来たのであります。

終戦になった時、モーク先生らは、その時すでに他に転勤になっていたその看守の方を探して会見されました。双方とも当時のことを思い起して感慨無量だったそうです。先生らはあなたがあの当時、私たちに示してくださったご親切には、何をしてお礼してよいかわかりません。私たちは近いうちにアメリカに帰ってまた日本にもどります。アメリカの友人たちは、あなたのご恩に対して、何をしてお報いしたらよいでしょうかと、私たちにたずねることでしょう。あなたが、何でも欲しいものがあつたら、どうか遠慮をなさらずにおっしゃって下さい。それが何であっても、私たちと私たちの友人は、心からの感謝をもってあなたに差しあげようと思いますから...」と言われました。やがてアメリカに帰られ、再びもどっておいでになったモーク先生たちの手で、アメリカのお友達からの数々のおみやげがふかい感謝をこめてあのかたに贈られたのは申すまでもありません。その方は終戦後、新しい仕事を与えられ、東京に近いある市の教会の誠実な会員として信仰生活に歩んでいられるのであります。

はからずもモーク先生を存じあげてを許され、先生を通してあの惨たん、荒涼とした戦時のまっただなかにも、生き生きとした命の真清水が流れ出ていた現実を知らしていただいたことは、ほんとうに感謝であります。

（早稲田大学教授）